# アオスジガンガゼと間違われてきたガンガゼの一種

°張 成年（水研セ中央水研）・梶ヶ谷義一・黒木洋明・丹羽健太郎・渋野拓郎（水研セ増養殖研）・名波 敦・清本節夫（水研セ西海水研）

【目的】日本中部以南の沿岸にはガンガゼ（*Diadema setosum*）とアオスジガンガゼ（*D. savignyi*）の2種が分布すると考えられてきたが、遺伝子解析により本土にはアオスジガンガゼと誤査定されてきた第3の種が存在することがわかった。このガンガゼ種についての遺伝子解析と形態観察結果について報告する。

【方法】形態的にガンガゼ及びアオスジガンガゼと査定される標本は増養殖研究所横須賀庁舎前（三浦半島）、長崎県壱岐島、沖縄本島及び石垣島で採取した。水中画像を撮影し、研究室で生殖巣、口部筋肉あるいは管足をDNA抽出用に採取した。標本のいくつかはブリーチ後、殻の形態を観察した。mtDNAのCOI領域の塩基配列を用いて系統樹を描いた。

【結果と考察】系統樹には明瞭な3クレードが見られ、ガンガゼ(n=10)、琉球諸島のアオスジガンガゼ（9）、荒崎と壱岐のアオスジガンガゼ（17）（以降アラサキガンガゼ）に分かれた。アオスジガンガゼとアラサキガンガゼ間の塩基置換率は約10%であり、明らかに別種と考えられた。水中画像を比較すると、間歩帯に伸びている青いY字型ラインの形状に顕著な違いが見られた。またアラサキガンガゼの多くにはY字型ラインの叉状部に顕著な白色の筋が見られた。水中で観察されるこのような顕著な差異は、空中及び固定後では観察が困難であった。過去の文献を調査したところ、1939年に記載されたものの、その後ガンガゼ（*D. setosum*）のシノニムと判断された*D. clarki*と類似点が多いことが示された。今後、*D. clarki*の模式標本との比較が必要であるが、50年以上もの間、本土のアラサキガンガゼはアオスジガンガゼとして誤って扱われてきたものと考えられる。